

漢語との接触による内蒙古自治区における モンゴル語の変容の実態解明

小林 陽子

愛媛大学法文学部 研究生

緒 言

中国内蒙古自治区のモンゴル族の人口はモンゴル国のそれをはるかに上回り、世界最大のモンゴル族コミュニティを形成している。ただ、その内情には大きな差異が認められる。モンゴル国のモンゴル族が、その人口の約95パーセントを占めているのに対し、中国内蒙古自治区のモンゴル族は、自治区内の人口の約17パーセントを占めるにすぎない。清朝時代、漢族がモンゴル高原に立ち入ることは公的には禁止されていた。しかし「解放」後は徐々に漢族が進出し、政府も入植を奨励する政策への転換を図った。希少金属の宝庫である内蒙古自治区の近年の経済発展は目覚ましく、近年の経済成長率は10%をはるかに超えており、首都である呼和浩特市の中心部には高層マンションが林立し、急激な都市化が進行中である。内蒙古自治区では、中国政府の「少数民族区域自治法」における「自言語使用の権利」政策のもと、現在も伝統的なモンゴル文字が使われている。例えば街中の道路標識や看板には、漢語とモンゴル語の両方を併記することが義務付けられている。子供たちの教育は「民族教育」が一般的であったが、近年においては、漢語とモンゴル語両方を教える「双語教育」を選ぶモンゴル族がほとんどである。事実、圧倒的多数言語コミュニティを形成している漢民族の言語である漢語の運用能力が生活に与える影響は大きい。前掲の呼和浩特市を中心に漢民族が経済の中心となり富をもたらしている社会構造下で、少数言語コミュニティ化したモンゴル族が豊かな生活をしていく条件として、漢語の習得は不可欠となっている。若い世代の中にはモンゴル語を解さない者も増加の一途をたどり、民族学校への進学者も激減している。このような状況下、漢語との一方的な言語接触にさらされているモンゴル語の構造そのものも変容を余儀なくされている。本研究はその実態の一端を解明することを目的とするものである。

調査方法と内容

後述の禱麗琦（2010）等の先行研究の妥当性をコンサルタントに対する面接調査の方法を用いて検証した。また、今回は費用や期間の点で断念を余儀なくされたが将来予定している現地滞在と調査の充実に向けて、言語接触に関する知見の収集と少数民族言語の研究手法の調査のため北京・台北・ソウルの研究機関所属の関係者の教えを仰ぐとともに、東洋文庫や国立民族学博物館所蔵資料の調査を行った。

結果と考察

言語によっては単に語彙の借用にとどまらず、言語構造の、より中核的な部分に影響が及んでいる場合がある。蒙漢混合言語の存在は早くから指摘されていた。それが今日では、特に都市部のモンゴル族の通常の会話語となっているのが実情である。これまで内蒙古自治区におけるモンゴル語について、漢語との接触の影響に関する調査はあまり行われず、先行研究も多くはなかった。ようやく今世紀に入り、主として中国国外に留学しているモンゴル族の学生を中心に、内蒙古自治区のモンゴル族に関する様々な研究が行われるようになった。当初は、社会学的視点からの意識調査（婚姻、民族文化、教育など）が多くみられたが、言語学的視点からモンゴル語に対する漢語の影響を調査した報告も徐々に増えてきている。中でも、禱麗琦（2010）は、自身の故郷である内モンゴルシリンホト市でフィールドワークを行い、モンゴル語における漢語の借用ストラテジーについて報告した貴重な記録である¹⁾。

言語接触にはいくつかの形がある。語彙の借用は最も普遍的に観察できる現象であり、新事物の導入がその名称の借用をともなうことは珍しくはない。日本語について言うなら昨今多用される外来語も接触による語彙の借用であり、古くに遡るなら漢語もそれにほかならない。ただ、日本語では、語彙以外の面で漢語や西洋諸言

語が日本語の構造に影響を及ぼしたことはほとんどない。いわば言語の中核的な部分については、実際のところ、ほとんど影響を受けていないのである。

ところが、内蒙古自治区のモンゴル語の場合は、漢語の要素が文法構造の深部に浸透しつつある。まず挙げられるのが、漢語名詞にモンゴル語動詞ki-(一する)を付加して動詞化する方法である。これは日本語の「外来語+する」と同類であるが、この言語ではさらに進んで、「感冒」が/gammoo/としてそのまま動詞語幹として転用され、これに直接屈折語尾が接続する。あえて日本語に直訳するなら「感冒る」である。ただし、禱麗琦(2010)等の先行研究では、調査対象者の社会的属性との関連については十分な考察がなされていない。また、漢語であるからといって、すべてがこのように動詞化されるわけでもないが、その詳細は明らかにされていない。以上に着意した筆者は愛媛大学に在籍する内蒙古自治区出身のモンゴル族の留学生たちに調査協力を仰ぎ、禱麗琦の考察が及んでいない点を分析するとともに、同稿では取り上げられなかったコンサルタントの属性と言語変容の相関を検討した²⁾。本研究はその延長線上にあって、一層の洗練を試みるものである。

一般的な傾向としては、学校教育等で漢語に触れる機会が少なかったと思われる高年齢層ほど漢語の影響が乏しく、逆に幼い頃から漢語に親しんだ、もしくは、高等教育(漢語による授業を避けて通れない)を受けていると思われる若年齢層になればなるほど、漢語の影響が強いと考えられている。したがって、漢語のモンゴル語への浸透度は、学歴が高く、年齢が低い者の方が高いとするのが妥当であろう。

しかしながら、筆者自身が行ったコンサルタント調査の結果を見ると、漢語の影響をより強く受けているはずの若年齢層において、逆に、漢語借用に対する容認度の低さが目立つ。モンゴル語動詞ki-を介してモンゴル語化する形式が、漢語に親しんでいる高学歴の若年者にとって容認しづらいのは、漢語語幹に直接モンゴル語の接辞を付ける用法よりも、かえって手間がかかるからとも考えられる³⁾。

いずれにしても、この事実は、漢語の影響がより深刻であることを物語る。低学歴・高年齢者の場合、漢語の影響があるにはあるが、まだ日常的な会話の多くはモンゴル語である。漢語が浸透するとしても、モンゴル語の中の限られた部分にとどまっている。ところが、高学歴・低年齢者においては、むしろ日常的な会話の多くが

漢語であり、モンゴル語を話すとしても、多少こみいった話になると、漢語にコードスイッチされるのではないかと思われる。つまり、母語への干渉の域を超えて、漢語の浸透が進行しており、漢語優位の二言語使用者と化している可能性がある。

これらの考察の一端を、国際モンゴル語学会議(ロシア国立科学アカデミーサンクトペテルブルク支部、2013年10月)および第11回ソウル国際アルタイ学会(ソウル大学校、2013年12月)で発表し批判を仰いだ。それらを踏まえて本助成金により新たな知見の開拓に努め、その成果を第57回常設国際アルタイ学会(ロシア国立アカデミー極東支部【ウラジオストック】、2014年9月)で発表することが可能となった。

筆者が行ったコンサルタント調査では、同じ内蒙古自治区出身のコンサルタントの間で漢語使用に対する容認度に大きな差が見られた。同じA市出身のモンゴル族コンサルタント同士でも都市部出身者とステップ出身者では、前者がより漢語への親和性を見せたのに対し、後者はモンゴル語に同じ傾向が見られた。このことは、漢語借用に対する容認度の違いが各々コンサルタントの出生環境に起因することを示している。ただ、昨今のメディアの急速な発展に伴い、この状況も変わりつつある。SNS等でもより手軽に扱える漢語を使用する者が大半であり、事実、筆者のコンサルタントたちも例外ではない。このことは漢語の浸透に一層の拍車をかけている。B市内のモンゴル族学生より同じB市のステップ地帯で生活する牧童たちの方が漢語をよりうまく使うとの報告もある。今後、内蒙古自治区のモンゴル語はUNESCOの言う「危機言語」(endangered languages)となる可能性も否定できないのが実情である。

以上を踏まえ、日本語における漢語の影響と対照させた考察を加味した研究成果を本年8月に中国吉林省延吉大学で開催予定の第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウムおよび9月にスロヴァキアで開催予定の第58回常設国際アルタイ学会において公にする予定である。

今後の課題

言語接触が言語の構造変化を誘発する源泉は、個人話者の二言語併用におけるコード間の干渉(interference)である。その変化が目に見える形で現れるためには、そのような接触がある程度長期にわたって、しかも、個人よりは集団のレベルで起こらなければならない。禱麗琦

(2010)は、「漢民族の人口に対する少数民族人口の割合の低さと漢族との雑居性の高さ」を中国の特徴として挙げている。雑居性が高ければ高いほど、言語が接触する度合も必然的に高くならざるを得ない。したがって言語間の干渉も一方的なものとなることは想像に難くない。

一連の研究によって、内蒙古自治区の都市部においてはこれが加速度的に進行しており、特に若年層ではそれが顕著であることが明らかとなった。今後の進行如何では内蒙古自治区のモンゴルが一種の「危機言語」となる可能性もある。その当否は筆者の判断する範囲内ではないが、その過程をつぶさに観察できる機会が提供されていることは間違いない。その研究はモンゴル語学のみならず、言語接触研究一般においても価値ある知見を提供するものと思われる。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団の第52回学術奨励金に採択いただきましたことは、大変大きな励みとなりました。心より感謝申し上げます。愛媛大学法文学部、大学院法文学研究科在籍の中国内蒙古自治区出身の留学生のみなさん（塔娜さん、劉高娃さん、海霞さん、関穎穎さん、ハス達来さん）にはコンサルタントとして協力いただきました。また国内外の研究者各位からも非常に有用な助言をいただきましたことを記して感謝申し上げます。成果を現地社会に還元できるよう、今後とも日々努力してゆきたいと思えます。

文 献

- 1) 禱麗琦：千葉大学人文社会科学研究，21, 299-319, 2010.
- 2) 小林陽子：人文学論叢，13, 11-24, 2010.
- 3) 小林陽子：人文学論叢，14, 93-104, 2011.